

---

# **魔法先生ネギま！？ 剣聖の騎士**

剣聖の騎士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！？ 剣聖の騎士

### 【NZコード】

N4714W

### 【作者名】

剣聖の騎士

### 【あらすじ】

子共を助けその代りに死んだ白金剣斗しろがねけんとは女神アテネと出会い。そしてアテネから異世界『ネギま！？』の世界に行く事になった剣斗。そして彼の前に剣豪伊藤一刀斎が現れ剣斗と一緒に行くことなり。二人の冒険が今始まる

## 女神と剣豪と騎士

『女神と剣豪と騎士』

「…………」

目が覚めるとそこは何も無い白い空間が広がっていた。

「俺は確か、子供助けて、そして、死にました」あなたは？

俺の前に白い服を着た女性が立っていた。

「わたしの名は、アテネ。あなたたちから女神と呼ばれているものです」

「確かに、都市の守護神や知恵・工芸・学芸の神と呼ばれる女神ですね」

「そうです。それと、あなたが助けた子供は大丈夫ですよ。ケガ一つありません」

「それは、よかったです。それで、俺は天国と地獄どっちにいくのですか？」

俺は目を閉じて女神アテネの返事を待つた。しかし、返ってきた言葉は俺の予想とは違った言葉だった。

「あなたは天国にも地獄にもいません。あなたには異世界へ行つてもらいます」

「え？？」

異世界？？魔法の世界とかそんなものか？？

「そうです」

心読まれた！？

「ホントは少し違うのですけどね。簡単に言つてマンガとかですかね」

無視された！？

「女神ですから。まずは、《ネギまー?》の世界にでも行つてもらいます」

「ネギまー? です・・・ん。まずは? ?」

「あなたには《ネギまー?》以外にもわざわざ異世界に行つてもらいます。簡単に言つと異世界の旅人ですね」

「はあ・・・」

「気に入りませんか?」

「いえ、そうじゃなくて・・・剣術しか取り柄の無い俺にどうして?」

「他の神なら、うつかりやミスでとかで転生しますがあなたは違います。わたしの勘があなたを選びました」

「俺は勘で選ばれたのか! ?」

「わたしの勘は良く当たりますよ。恋姫で例えるなら孫策なみに」

「例えるな! ! そして、なぜ孫策! !」

「知らないのですか? 恋姫の孫策伯符を」

「・・・もういいです」

「素直な人は好きですよ、わたし」

「そりやどうも。それで、一つ聞きますけど能力とかくれるのですか? さすがに今そのままだと瞬殺されますよ。高確率で」

「その辺は大丈夫です。魔法の世界では魔力は多めにしておきまし身体能力もある程度上げときますので」

「それを聞いて安心しました」

「ですけど。魔力の使い方は向こうの世界で習つてくださいね」

「了解」

「あとは・・・何か欲しいものとかあります? ある程度でしたらプレゼントしますけど。さすがに無限の剣製や王の財宝はあげれませんけど」

「いりませんよ。そんなチート。俺がほしいのは、一つ・今から言う剣。一つ: 魔法の能力を雷・闇・氷の属性にする。これだけで

す

「わかりました。それで、剣とは？」

「まずは、夫婦剣の干将・莫耶。一本目は日本刀。二本目は、可能なラエクスカリバーで」

「いいでしよう。全部お渡しします。それと、日本刀の名はいいのですか？なんなら名刀を用意しますけど」

「構いません。本当は俺が名をつけたいのですが」

「なら、これをどうぞ。まだ、名は無いので丁度いいです」

アテネは光を集め一本の日本刀を取り出し俺に渡した。その刀は、俺が見ても途轍もない名刀だと寸時でわかった。

「ありがとうございます。こんな名刀頂いて」

「かまいません。それで、その剣の名は」

「そうですね・・・氷華。<sup>ひょうか</sup>氷の華と書いて氷華。どうでしょう？」

「いい名ですね。それと、あなたが寝ている間にあなたに付いていきたいという人物が入るので会わせますね」

アテネは消えすぐに戻ってきた。彼女の横には黒髪の女性が立っていた。しかも日本刀を腰に据えて

「君は誰だ？」

「名前を聞くならまずは自分からだろ？」

「そもそもそうだが、今回は断らせてもらうよ」

「そうか、確かにワタシがお前に付いてきたいと言つたからな。ワタシの名前は伊東一刀斎だ」

「は？？」

伊東一刀斎？あの一刀流の祖と言われる人が女・・・

「なんだ。ワタシが女なのがそんなにおかしいか？」

「そ、そうじゃなくて、その・・・・まさか一刀流の祖が女だったとは・・・その・・・ごめん」

「別に構わん。それでお前の名は？ワタシは答えたんだ。教えてもらつていいだろ？」

「そうだな。俺の名前は白銀剣斗。しろがねけんと白剣流の剣術者だ。よろしく

俺が右手を出すと一刀斎はそれを掴み握手した。

「よろしくな。剣斗」

「コホン。それじゃ、行つてらっしゃい。一人とも」

「ああ」

「世話になつたな。アテネ」

そして俺達は光に包まれ消えて行つた。新たな人生へ

## 救出

『救出』

「お・・・・きる。・・・と」

「ん・・・・」

「おきる。剣斗」

「ん・・・」は

「転生した世界だ。大丈夫か?」

「ああ、だいじょうぶ!!」

俺が目を覚ましてみると一刀斎との顔が目の前にあった。それは俺が少し前に行くとキスをしてしまうほどの距離だった。

「斎。頼むから離れてくれ。顔近すぎるから」

「詰まらん男だな。ここは接吻ぐらいするもんだろう。それと、どうしてワタシのことを“斎”と呼んだ?」

「一刀斎なんて呼びにくいし、お前は女だろう。だからだよ」

俺がそう言うと斎は少し考えすぐさま俺を見つめなおした。

「本来なら親からもらった名を代えたくないのだが、剣斗がそう呼びたいのならかまわん」

「なら、これからは“斎”って呼ぶから。よろしくな」

「ああ、」ちらりと

俺と斎は再度握手を交わした。

「それと、アテネから手紙を預かっている」

俺は斎から手紙を受け取り読み始めた。

『白金剣斗へ

この手紙を読んでいるといつ事は無事に『ネギまー?』の世界に着いたようですね。一応本編の始まる十年ぐらい前に送つておきましたから十分準備ができるとおもいます。それと、あなた達

「人の身体を不老の身体にしておきましたから年齢は気にしないでいいですよ。あとエクスカリバーと干将・莫耶はあなたの影の中に入れておきましたから闇の魔法を覚える事をオススメします。といいますか、闇の魔法を覚えない限り出せないと想いますので、がんばってください。

わたしからの報告は以上です。いい生活を

### 女神アテネより』

「だそうだ。取りあえず、どうする？」  
「そうだな。まずは、街に行く事が先決じゃないか。」「何がどこなのかもわからないし」  
「そうだな。なら、さつさと行きますか」  
俺達は町を探すために歩き出した。

一時間後

「ハア、ハア、ハア。や、やつと抜けたああ……」  
「さ、すがに、ワタシもここまで深い森だとはおもわなかつたぞ」  
俺と斎はやつと森を抜け川とその奥に見える街を見て感動を覚えた。そして、橋で川を渡るべく川岸を歩いていくと

「このちゃん！！」

川の中で必死に岩にしがみついている子供と慌ててどうしてたらいいかわからずあたふたしている子供がいた。

「斎。俺は川にいる子を助けるからもう一人を頼む」  
「わかった」

俺は急いで川に入り女の子を抱えながら川からあがつた。

「大丈夫？ このちゃん」  
「う・・・うん。大丈夫やで、せつちゃん」  
「少し水を飲んだようだな。それに、このままだと風邪をひくな。悪いけどこの子の家まで案内してくれるか？」

「たま  
ごはん」

『関西呪術協会』

S i d e : 刹那

「このちゃん! !

私どこのちゃんは近くの川に遊びに来た。せやナゾ、このちゃんが石に足を取られてそのまま川の中に落ちてもうて今にも流れされそう。

「まつてこのちゃん。今助けに行くから」「あの子は大丈夫だ」・え?」

突然うしろから声が聞こえて振り向くと綺麗な黒髪のお姉ちゃん。

「フタシのつれがあの子を助けるから、お前はここで待つていればいい」

そう言われ川を見ていると男の人がこのちゃんを連れて川からあがってきた。私は慌ててこのちゃんに近寄りこのちゃんの無事を確認した。

「大丈夫? このちゃん」

「う・・・うん。大丈夫やで、せつちゃん」

このちゃんの声が弱弱しい。それに唇も紫色で・・

「少し水を飲んだみたいだな。それに、このままだと風邪をひくな。悪いけどこの子の家まで案内してくれるか?」

「は、はい」

男の人気がこのちゃんを抱きかかえ私のあとを付いてくる。

私がもつと強かつたらこのちゃんを助けられたはず。今よつもつともつと強くなつてこのちゃんを守るんや。

S i d e o u t

「この度、娘のこのかを助けていただきありがとうございます。」

私がこの屋敷の長をしています近衛詠春といいます

サイドポニーの子について行つたら途轍もない大きな屋敷??に案内され。屋敷の周りには巫女さんがいて、抱いている子を見ると驚き慌てていた。俺がその子を近くにいた巫女さん預けるとその子を抱えて急いで屋敷の中に入つて行つた。おそらく風呂場に行つたのだろう大分体が冷えていたからな。屋敷にあの子に入るのを見届けると別の巫女さんに「長が会いたがっていますので、お入りください」と言われ入つてみると渋いおじさんが待っていた。

「当たり前のことをしただけですよ。俺の名前は白銀剣斗といいます。隣のはつれの」

「伊東斎だ。すまないとと思うが、剣斗も濡れているのでなあのこの後でもいいから風呂に入れてくれぬか?」

「構いませんよ。ついでに服も乾かしておきましょ。どうぞ彼女について行つてください」

「どうぞ。こちらです」

言われるまま俺はその巫女について行つた。屋敷もでかかつたら風呂もでかかった。だいの大人が十五人は入れるくらいの大きな檜風呂だった。

そして、風呂から上がつた俺は用意されていた服に着替えて斎達が待つ部屋へと戻つた。

「お風呂ありがとうございました。近衛さん」

「詠春でかまいません」

「なら、俺も剣斗でかまいません」

「わかりました。それと、伊東君から聞きましたよ。白銀君達は住む家が無いようですね。よかつたら家でくらしませんか?」

「俺は構いませんけど。いいのですか?見ず知らずの俺達を住まわせて?」

「剣斗君達は私の大事なこのかを救つてくれた。それだけで、十分な理由になります」

詠春さんの話を聞いて俺は少し考えていると隣にいる斎が小さく

頷いて見せた。この姿を見て俺の腹は決まった。

「わかりました。これからよろしくお願ひします。詠春さん」

「こちらそよろしくお願ひします。それで、剣斗君達にはこの

かの護衛もお願いしたいのですが?いいでしょうか?」

「いいですよ。俺達も何もしないでこちらに住まわせてもらうわけにはいけませんし。それと、詠春さんには話しておきたい事もありますから」

そして、俺は詠春さんに俺と斎が別の世界から来た人間である事を話した。最初は詠春さんも信じられない顔をしていたが、俺の真剣な顔を見て信じてくれて俺達に魔力の使い方を教えてくれる事になつた。

## 模擬戦

### 『模擬戦』

俺と斎が近衛家の屋敷に厄介になつてはや半年が過ぎた。詠春さんとの会話の後助けたこのからお礼の言葉を受け今ではすっかりの仲良しだ。このかも俺のことを「剣兄」と呼び斎のことも「斎姉」と呼んでいる。たまに三人で買い物に行くと見知らぬ人から三兄妹と間違われる事も多々会つたりし、その度に斎が「兄妹ではない！」と言つているが多分無駄な行動だと思つ。だから、俺はもう諦めている。

そして、今から俺達は朝食を食べようとしているのだが・・・

「なあ、このか」

「なんや？剣兄」

「どうして、俺の間に座つていいんだ？」

「ウチがここに居つたら迷惑？」

「うつ……」

するい。このかが俺の間に座つているから確実に上目遣い。これで、涙目にされたら・・・

「剣斗。お前の負けだ諦める」

「斎。頼むから義理の姉としてここは叱つてくれ」

「ワタシは姉ではない！！それに、そんな事をしたらこのかが泣くぞ。そうなれば・・・・わかるだろう」

俺がこのかを見ると涙目で俺を見てくる。この顔を見たら断れる男はない。

「仕方が無い。降参だ、このか。その代り好き嫌いせず全部食べるんだぞ」

「うん……」

う〜〜癒される。この笑顔を見ればお父さんは今日も頑張れる

ぞつて、誰がお父さんだ！！そんな、ノリ突っこみをしていると詠春さんの背中から黒いオーラが・・・

「このか。その笑顔詠春さんにも見せてあげて

「わかつたわ。お父様（二郎）

卷之三

物語の世界へ

「」のかの笑みを見て詠春さんは豪快に鼻血を拭いて倒れた。周りにいた人達は急いで詠春さんの所に行き容態を確認するが、詠春さんの顔はとても満足そうな顔だった事だけは報告しておこう。

さて、詠春さんの鼻血騒動も落ち着き俺と斎は道場で軽く素振りをしている。もちろん真剣で。本来なら神鳴流の門下生と一緒にやるべきなのだが、俺は白剣流に斎は一刀流の祖のため詠春さんの誘いを断つた。そして、門下生のいないこの時間だけ斎と一緒に鍛錬している。無論詠春さんの許可は得ているし偶に神鳴流の人が俺と斎の稽古を見ていることもある。そして今斎が持っている刀は名を烈火一文字と言づらしくあの上杉謙信の愛刀姫鶴一文字の姉妹刀だと斎は言っているが・・・本当なのか？

「そうだな。やろうが、斎

程よい汗をかいて俺と斎は四歩半づつ離れ己の刀を向ける。この

かを助けた田から毎田欠かさずやってきた模擬戦だ

今日は俺が勝たせてやるぞ

それは「シジミは本氣を出させてから言ひやうがそ 猿シ」

言葉の終わりと同時に斎かものすごい殺気を感じる。俺はその殺氣を払いのけて斎に向けて切りかかる。しかし斎はそれを意図も簡単に受け止め俺に蹴りを入れてくる。その蹴りを鞘で受け止め足を払いのける。これが俺の流派白剣流の戦い方。

模擬戦が始まつて約10分が立つ。斎の一撃は受けたたびに強く重く感じてくる。これが斎の伊藤一刀斎の力だと日々感じているが、

今日こじは勝つ！！

「斎。俺はそろそろ限界に近い。次の一撃で勝負をつけないか？」

俺は冰華を鞘にしまい抜刀術の構えに入る。

「・・・いいだろう。こい！！剣斗」

「はあああああ！！」

斎も抜刀術の構えると同時に俺は自分の出せる最速の速さで斎に

切りかかる。そして・・・

「・・・引き分けか」

「ああ」

「剣斗もなかなかの剣客になってきたな。あとは「経験か」そう

だ

「経験は豊富だとおもったのだがな」

「まだまだだ。だが、すぐにワタシに追いつくだろうな

「斎に言われると自身がつくよ

「うぬぼれるな！！」

斎は俺の頭を鞘で叩いて行つた。けど、その去り際の顔は笑つて  
いる顔だった事は俺だけの秘密にしておこう。

## 旅立ち

『旅立ち』

どうも、詠春さんのとこに居候して一年が経ちました。やつと斎にも勝てるようになつてきて魔法も陰陽道の式紙召喚と呪返しならある程度出さるようになりこの一年はとても充実した一年でした。そして、俺と斎は詠春さんに呼ばれて本堂の一番奥の部屋にいます。

「詠春さん。話しつてなんですか？」

詠春さんは真剣な眼差しで俺達の事を見つめ決心したのか俺達に話し始めた。

「話とはこのかのことなのです。実は、あの子を義父さんのいる麻帆良学園に行かそうと思います」

「このかを関東に送る事はまずいじゃないですか？」

「確かに。あの魔力量を関東が見過ごすはずも無いだろう」

「それはこちらも同じ事です。このかの魔力を使って強行派は鬼神を甦らそうという情報も得ています。だつたらいつその事このかを関東に行かせた方が」

「それだと、このかが悲しくなるのではないか？たつた六歳で親元を離れさせなんて、普通ならありえませんよ」

「だとしても。このかを危険な目にあわせるわけには行きません。あの子には裏の世界を知つて欲しくないのです」

「それは無理だな」

詠春さんの言葉を聞いて斎は否定した。俺も同意見だ。詠春さんの昔話を聞いてあの人も英雄の一人である事は知つてている。だから、このかも英雄の娘と考えると関東の魔術協会も黙つていなかつる。なんらかでこのかを裏の世界に入れるはずだ。

「だから一人にお願いです。」このかと一緒に学園にいって、「お断りします」なぜですか？」

俺の言葉を聞いて詠春さんは驚いた顔をしている。しかし、それにはちゃんと理由がある。

「詠春さん。確かに俺と斎は詠春さんのおかげでここに住まわせていただいています。このかも兄妹だと思つています」

「だつたたら、なぜ??」

「実は一度魔法世界に行つてみようと思つて」

俺の言葉を聞いて詠春さんは驚きの顔を見せたがこれは決定事項だ。

「……わかりました。剣斗君の気持ちはホントのようですしかのかの護衛兼保護者は諦めます」

「すみません。けど、このかが中学になるまでは帰つてきますのでその時はこのかの護衛兼保護者やりますよ」

「そう言つて貰えると助かります。それでは明日はこのかと剣斗君達のお別れ会でもやりましょうか?」

「別にいいですよ。必ず帰つてきますから」

## 次の日

このかが麻帆良学園に向けて車で行つた。別れ際にこのかが泣いて俺のところに来たので前世から首に下げていた十字架をこのかに渡した。「俺のお守り必ず取りに行くから。それまで大事に持つてくれ」とクサイ言葉をこのかに言い。俺達は笑顔でこのかを送つた。

「さて、俺達も行こうか

「そうだな。当分ここ景色と見納めか」

「大丈夫ですよ。剣斗君と斎君の家は此処ですから。いつでも帰つてきてください」

詠春さんの言葉を聞いて俺と斎は小さく頭を下げ魔法世界に向つた。

## 帰等

### 『帰等』

「このかの入学式の始まる一ヶ月前に俺と斎は魔法世界から日本に帰つて来た。これは詠春さんとの約束を守るために帰つてきたわけだが、まずは京都にいる詠春さんに会いに行くと事にした。

「剣斗。早く行こう」

「待て太陰。斎、なんとかしてくれ?」

「あいつはお前の式神だろう。お前が何とかしろ」

まさかの援護なし。俺は仕方なく急いで太陰のあとを追つた。太陰は十二神将の一人で風将。見た目はどう見ても小学生なのだが俺より年寄り。詠春さんに式神を教えてもらつてためにし詠んでみたら太陰が出てきた。名前を聞いて俺と詠春さん驚いたよ。だつて十二神将だもんそりや驚くつて、普段は不可視の風で見えないようにしているのだが魔法世界に行つてからそんな事せずにいたらこっちの戻つてからもしなくなつた。おかげで戸籍とか偽造するのに手間取つたが

「都も久しぶりよね。あそここの餡蜜屋まだやつているのかしら? ?」

「太陰。まずは詠春さんのどこがさきだよ」

「わかつてるわよ。わたしだつてその辺は弁えていゝつもりだから

「それならいいが」

俺らは久しぶりに我が家に向けて歩いて行つた。

### Side : 詠春

この前手紙が来て約六年ぶりに彼かが帰つてくる事を知り屋敷いの女性人総出で料理に仕度をするとかで、男の私達はお払い箱状態

です。私本当にこここの長なのでしょうか？剣斗君のほうが長に向いているのでは・・・

「長。先ほどからなにをお考えになられているのですか？」

「いえ。ただ、こここの本当の長は私ではなく剣斗君なのではないかと思いまして」

「確かに、女性人総出で料理をするとかワタシは聞いた事がありません」

「悲しくなつてきましたね」

「長。それは言わないほうがいいです」

「それもそう」「長！」「どうかしましたか？」

「彼らが帰つてきました」

「本当ですか？」

「はい。もう間もなくこの部屋に来ると思います  
「わかりました。皆さん歓迎の準備を」

「「「はい」」

男ばかりですが、彼なら大丈夫でしょう。すると、襖が開き待ちに待つた三人が入つてきました。三人??

Side Out

やつと帰つてきた我が家。なんでも女人の人達は総出で料理を作つているらしい。今日は何か特別な日だつたかな？

そんな事を気にしながら俺達は詠春さんの待つ奥の部屋にやつてきた。襖を開けて入つて行くと詠春さんと神鳴流師範代の人がいた。

「ただ今戻りました。詠春さん」

「お帰りなさい。剣斗君、斎君。それと太陰様」

「詠春。別にわたしの事は様付けにしなくてもいいのに

「いいえ。十二神将の一人太陰様を呼び捨てになど私にはできません」

「かたいなあ～。剣斗と斎は普通に読み捨てなのに」

「ははは。仕方が無いよ太陰」

俺は笑いながら優しく太陰の頭を撫でてやる。太陰も撫でられる  
と田を細めてうつとりしあじめそのまま俺の膝の上に腰をかける。  
本当に可愛い奴だ。

「それで、魔法世界では何か収穫はあったのですか？」

「ええ。ある程度の西洋魔法は」

「そうですか」

詠春さんが頷いていたと俺の後ろから斎がとんでもない発言をした。

「それだけじゃない。剣斗は向こうでは二代目サムライ・マスター」と呼ばれながら聖剣の騎士とも呼ばれている

「一代目・・・サムライ・マスターですか・・・」

斎の言葉を聞いて詠春さんは少し困惑している。先の大戦で自分につけられた名がまさか俺に二代目と言ひ名をつけて呼ばれるとは思っていなかつたのだろう。

「・・・いいじゃないですか。二代目サムライ・マスター白金剣斗。その一代目にお願いがあります」

「わかつています。このかの護衛の件ですね」

「はい。このかに危害を加えるようでしたら容赦なくやつて下さい」

「それは魔法に関わらせよつとした奴も？」

「故意に関わらせようとするなら・・・」

詠春さんの目は本気だった。

「わかりました。けど、偶然もしくは事件に巻き込まれて知つてしまつた時は俺はこのかに魔法を教えますよ。いいですね」

「構いません。このかの事よろしくお願ひします」

詠春さんは俺達に頭を下げてお願いしてきた。別にそこまでしなくて引き受けたが、これは詠春さんなりのケジメだと俺は思つている。

その後は豪華な料理と共に酒を飲み魔法世界での出来事を夜遅くまで話し込んで行った。

『麻帆良学園』

ええーーただ今麻帆良学園の学園長室の前にいます。正直言つてこの麻帆良学園の広さを舐めていました。来た時は普通の学園よりも広いだろうと思つていたら全然違う。ここはもう都市。駅員にこの場所を聞いたら白い目線で見られて「今年からここで教師する事になりました。白金です」と答えたたらすぐお教えてくれた。何を想像していたのか……。

「入らないのか？剣斗」  
「入るよ」

「マナーとしてノックを一回したら中から声が聞こえたので入つてみると部屋の中には眼鏡をかけたおっさんと妖怪ぬらりひょんがいた。

「剣斗。この時代にもまだぬらりひょんは存在していたぞ」

「取りあえず生け捕りにしてテレビにださせるか」  
「フオ！ フオ！」

「君達。学園長を虜めるのもその辺にしてくれないか？」  
眼鏡をかけたおっさんが苦笑いしながら頼んできた。仕方ないから今回はここまでにしよう。

「初めてまして。近衛詠春さんのとこから来ました白銀剣斗です」

「ワタシは伊東斎だ」

「ワシはこの学園の学園長をしておる近衛近右衛門じじゃ」

「僕は高畠・ト・タカミチ。一応この学園の英語を教えておるよ」  
この人が詠春さんと同じ大戦の英雄の一人か。あまりパツとしないけど力はこの学園の中一番か。

「それにしても、婿殿もなかなかの者をよこしていくのう」

「そうですね」

「はつ？」

「おや？聞いておらんかったか。この麻帆良学園にははときたま侵入者が現れてのう」

「それを僕等魔法に関わる人達が撃退しているのだよ」

「つまり俺達にもそれに参加しようと？」

「一一代目サムライ・マスターと言われておる君の、お断りします」

最後まで言わせてもらえぬかのう」

「俺達が此処に来たのはこのかの護衛です。もし、その侵入者がこのかに危害を加えるのなら力を貸しましょう。しかし、このかに關係の無い者なら貸す必要はありません」

「しかしのう。お主も加わつてくれたらそれだけで他の生徒も安全に暮らせるのじやが」

「そんなこと知りませんよ。俺達はこのかに魔法を知られなかつたらしいのです。それと、もしこのかに故意に魔法を裏の世界に入れようとするのなら例え学園長でも殺しますよ」

「フォツ！！」

俺は学園長に殺氣をぶつけ自分は本気で殺すとその覚悟を知らしめた。

「わ、わっかた。わかったからその殺氣を收めてくれ」

わかつたようなので殺氣を收めてやるとジジイの頭から冷や汗が大量に流れていた。隣にいる高畠先生も汗を搔いている。

「年寄りは大事にするもんじやぞ」

「知るかー！それで、俺達の仕事は？」

「そうじや、そうじや。二人にはこの数学と古典の教師になつてもらう」

「わかつた。それと住む場所はもう決まっているからわざわざ決めなくていいぞ」

「フォツ！！」

「それと入学手続きしたい奴いるからくれないか？」

「誰を入学させるきじや？」

「娘だが。それがどうした？」

「娘がおつたのか」

ジジイが俺と斎を見てニヤニヤしている。こいつ殺していい??  
いいだろ?。今後のために

「娘と言つが、戦争孤児だ。向こうの世界でたまたま見つけて剣  
斗になつたから連れてきただけだ。別にワタシと剣斗の子では無  
いぞ。ぬらりひょん」

「そうかそうか。それなら構わんぞ。手続きはこちうらで済ませて  
おけ」

「それじゃ、俺達はもつ帰るから」

「待つてくれ。やはり警備?「却下だ!!」う、うむ」

俺は声と共に学園長室を出て行つた。今日はホテルに泊まつて明  
日は生活秘術品を買え揃えないといけないな。だって部屋には布団  
も何も無いのだから。それに太陰に学校に行くことも教えておかな  
いと。あいつビックリするだろ?」

## 入学式

### 『入学式』

S i d e : このか

お久しぶりです、近衛このかやで。お父様の命令で麻帆良学園に来てもう六年が立ちウチも今日から中学生になりました。親友のアスナのおかげで小学校は楽しく生活できただけどやつぱ剣兄と斎姉がないと悲しかったわ。

「なにやつてるの？このか。早く行かないと遅れるわよ」

「あつ！待つてなあ～～」

「・・・・であるため。皆頑張るのだぞ。フオ、フオ、フオ」  
おじいちゃんの長いあいさつがやつと終わつたわ。隣にいるアスナなんて最初から眠つていて全然聞いてないし。次は新任の先生の挨拶やな。どんな先生ややろ・・・・うそ！！

「ええ～～新入生の皆さん。ご入学おめでとうございます。今年よりこの麻帆良学園本校女子中等部の数学を教える事になりました白銀剣斗と言います。私は1・Aの副担任もやらせてもらいます。どうぞよろしくお願ひします」

パチ、パチ、パチ・・・・・

剣兄のあいさつが終わり周りから拍手の音が聞こえてくる。けど、今のウチには関係あらへん。あの剣兄と一緒に学校にいける。あとは、斎姉やな。どこの学年になるんやろ？

「伊東斎と言います。ワタシも白銀先生と同じく1・Aの副担任をやらせてもらいます。担当教科は古文です。びつぞ、よろしくおねがいします」

パチ、パチ、パチ・・・・・

ウチの学園生活最高の始まりや！－！

Side out

三國志演義

「そうです。」JUNの生徒と一年長くて二年は同じ生徒は一緒にです

۱۰۵

- 10 -

俺の問いに高畠先生は苦笑いをして返してくる。どうして俺が呆  
れているかというとアレだ。学校では定番のトラップ黒板消し落と  
し。まさか初のH.Rで仕掛けられているとは、胃薬が必要だなこれは

卷之三

「善処しよう」

「それで、初のH.R.でこれですか？」

卷之三

俺は諦めて廊に挟んである黒板けしを取り教卓のほうへ向った。  
どうして俺が先頭なんだ？？

開泰院

「さすが先生。わかつてゐる！！」

あいには確かに朝倉和美たな  
ガメラ持てないで」とは何かた

「……………」な  
くはんてーな

にはいりましょう。質問ある人?」

卷之三

全員か！？

「玉葉御門院」の「御門院」は、元の姓。

「それが、いいですね。では、赤石君」

白銀先生と伊東先生歳[に]いくですか?」

「今年で23です」

「ワタシは22だ」

「誕生日いつですか？」

「7月5日」

「9月1日」

「彼女彼氏いますか？」

「黙秘！」

「白銀先生ズバリ。このクラスの中に気になる子はいますか？」

「そうだな～～近衛だな」

「おお～～～～～」

「その理由は？」

「近衛とは一時期一緒に暮らしていたからな。あの近衛がここまで美人になるとはおもわなかつたよ」

「これは脈アリと考えていいでしょうか？」

「それは黙秘で」

「このあと色々質問されチャイムと同時に終了した。仕事が終わったらこの会に会いに行くとしよう。」

「」のかとの再会

『一のかとの再会』

Side:明日菜

おかしい？？寮に帰つてからこのかの様子がいつもと全然違う。さつきから首にかけているロザリオを眺めながら「一二二」と笑つてゐるし。何時ものとはちょっと違う大人びた服を着ている。

かかれてゐるが、たゞ

גַּעֲמָנִים

「そこへ おかしなアスナやな」  
ダメだ。完全にいつものこのかじやない。すると扉からノックの音が聞こえたから扉を開けてみると白銀先生と伊東先生、同じクラスの白金さんが立っていた。

「んじゃよ。すまないけど、このかはいるかな?」

「はい、今呼ひますね。このか、白銀先生かに、鍵兒！！」

「おつとー！久しぶりだなこのか。見違えたぞ！」

「そりや六年振りやもん。ウチかて大きくなつてゐるわ。けどな、そんなん関係ないねん。ウチな、剣兄から預かつた口ザリオ大事に持つてたんよ。毎日肌身離さず持つて・・・たんよ」

「う・・・うええええええええええ・・・」

「ののかが白銀先生の胸の中で泣き出した。」ののかの泣き声に部屋にいた皆が何事と思いながら出てきたのは当たり前。さすがにこれは不味い。伊東先生もそう思ったのか白銀先生に中に入るよう言

つ  
た。

「剣斗。取りあえず中に入ろう」

「そ、それもそつだな。悪いな神楽坂。部屋に入ってくれないか  
？」

「ど、どうぞ」

取りあえず先生達を部屋の中にいれお茶を出し座った。

「H Rでも言つていた事はホントだったのですね」

「別に敬語じやなくていいぞ。俺もその方がいいし  
「わかつたわ」

「それで、剣兄達は今までどこにおつたん？」

「世界中あちこちさ。それと太陰は俺の妹みたいになつてているか  
らこのかから見ると義理の妹感覺でいいぞ」

「ほんまに！…よろしくうな。太陰」

「よ、よろしく」

「あかん。めっちゃかわいいや～～ん。剣兄この子ウチにくれ  
へん？」

「このか、太陰はモノじやないぞ」

「いいやん。剣兄のいけずう～～～」

「のかがす」く良い笑顔で笑つている。わたしと会つて今まであ  
んな笑顔余り見せなかつたのに白銀先生がきたらそれが普通の顔の  
ように笑い続けるなんて。

「・・・スナ。・・・てる？」

なんか嫉妬しちゃうな

「アスナ。聞いてる？」

「え！？なに？？」

「だから、剣兄がこれから」飯食べに行こうやつて。アスナも一  
緒に行けへん？」

「え！…でも、久しづびの再会ならわたしみないな知らない人い  
ないほうが」

「何言つてんだ。」飯は大勢いたほうが楽しいだろう。それに俺  
らがいない間このかと一緒にいてくれたお礼もしたいんだ。来てく  
れるだろ？」

「そ、それじゃ、お言葉に甘えて」

「そうと決まれば行くで。剣兄。ウチのオススメ屋台に連れて行って上がるから期待しててや」

「それは楽しみだな」

「のっかは白銀先生の手を引っ張つて寮を出たけど明日はクラスの皆にどう説明するつもり??わたしにも被害出しちゃひじゃない。」

## 鬼退治

『鬼退治』

入学式から数日が立ち俺らも教師としてまずまず出来るようになり今日も俺は学年主任の新田先生と色々と授業の事を話しているうちに夜遅くまで学校にいた。

「参ったな。正直ここまで遅くなると思わなかつた。新田先生の話少し長いもんなあ」

腕に着けている時計の針は夜の11時を指している。さすがにこのかもこの時間なら寮に帰つているだろ。

時計を見ながらこのかの事を考えていると学園のあちこちから複数の魔力を感じた。この禍々しい魔力は鬼の類いのモノか。さすがにこの数は厄介だな。

(斎。感じてるか??)

(ああ。鬼の類いの魔力を)

(恐らく呪術協会の強行派だらう。身内の不始末は身内でやるか)

(それで、どうする??ワタシも行つた方がいいか??)

(いや。必要になつたら召喚するから太陰と一緒に準備したいて欲しい)

(わかつた)

さて、このかに害するモノは死んでもらうか

S i e d : 桜咲

お嬢様を護るために修行をして、お嬢様と同じ中学になりやつとお嬢様を護れるようになった。しかし、お嬢様は私よりも新任の白銀先生や伊東先生、同じクラスの太陰と一緒にいる事が多い……。

「ううん。今はそんな事考えているより仕事、仕事。

「どうした？桜咲」

龍宮が私を見てくる。

「なんでもない」

「不安なら帰つても構わない。一瞬の緩みが敗北の原因になる

からな」

「わかっている」

不安はない。この仕事もお嬢様の護衛も兼ねていてもわかつていて。大丈夫問題□

「！」、「？」

「桜咲」

「わかっている」

魔力を感じた私と龍宮は戦闘の準備を始めた。すると田の前に鬼共が召喚された。

「ほ、ほう。ワシ等と勝負するみたいじゃ のう」

「どれどれ。ちょっと肩を揉んでやろうつか」

「黙れ！！斬岩剣！！」

私は目の前にいる鬼を切り裂いていき後ろから来る鬼は全て龍宮が射ち抜いてくれる。だから私は前の敵だけを撃てばいい。ただ、それだけだった。

「ハア、ハア、ハア……」

おかしい。あれから30分ほど立つていてははずなのに全然数が減らない。むしろ増えてる。さすがに、もう体力が……

「刹那！！」

「え？？あつ！！」

龍宮に叫ばれて私の田の前に鬼の金棒が振り下ろされていた。私

「このまま死ぬんだ。」「めんねこのちやん。」このちやんを守つて上げられなくて……

「…………」

私が目を閉じて待つていても金棒は来ない。恐る恐る口を開けてみるとそこには光り輝く西洋の剣で金棒を受け止める白銀先生がいた。

「全く。他の場所には先生が居たのに一番数の多い此処にはないとわな。大丈夫か？」桜咲

「あ・・・はい」

「それはよかつた。お前等、俺の生徒に手を出した覚悟は出来てるだろうな？」

白銀先生。それはちよつと違いますよ／＼

「今度はお前か」

「貴様はワシ等を楽しませてくれるのか？」

「ああ、全員黄泉の国に送つてやるぜ。召喚！……白銀剣斗の従者。伊藤一刀斎！……十二神将太陰！……」

先生！……あなた一人も契約しているのですか！……

### Side out

「ああ、全員黄泉の国に送つてやるぜ。召喚！……白銀剣斗の従者。伊藤一刀斎！……十二神将太陰！……」

一人を呼び出すと桜咲も龍宮も驚いた顔をする。確かに今の魔法使いの契約は将来の相手のみと考えられているみたいだが本来は主人の盾でありサポートする事が役目だ。斎といつしたかつて？？そんなの魔法世界に行つたときにだよ。どっちが従者かでもめる事無く契約し・・そこ、カッターナイフを投げようとしない。危ないだらび。

「やつと呼ばれたか」

「本当よ。わたしだつて久しぶりに全力を出したいわよ」

「すまない。けど、一番多いところで呼んだんだからいいだろ？」「そうだな。こいつも偶には血を吸わせておかないと機嫌が悪くなる一方だ」

・・・怖いな、烈火一文字。太陰なんてガタガタに震えているぞ。

「さて、お前等。黄泉に送られるか」

「烈火の塵となるか」

「選ぶがいい！！」

「ちよつと！！わたしのセリフは？？」

「お前は後方支援だ」

「なんでよ！…！」

「お前も血に塗られたいか」

「ごめんなさい」

「ならいい」

斎、怖えええええ

「わつきからワシ等の事を空氣にして・・・ヤロウ共！…あいつらを血祭りにするぞ」

「おおおおおおおお！…」「」

鬼達が一斉に掛かつて来た。まあ、相手がいくらいても俺と斎には関係ないけどね。

「はああ！…」

俺と斎は来た鬼に一太刀いれ次々に消滅していく。その剣捌きは自分で言つのは恥ずかしいがまるで舞のように捌き全てのものを魅了する動きを俺達はした。

鬼を倒して行くうちに数も徐々に減つていき鬼達の動きが止んだ。

「どうした？？」

「どうやら時間切れのようだわい。おぬし等の勝負はまたいづれじやのう」

「そうか。なかなかいい戦いだつたぞ」

「貴様もな。名前を聞いても構わんか？」「

「ワタシの名は伊東斎。一刀流の使い手だ」

「伊東斎。いづれまた剣をぶつけ様じやないか？」

「ああ。いづれまた」

「ふふう、はははは・・・」

鬼達は笑いながら消えて行つた。・・・俺泣いて無いもん。最後のほう空氣だとしても泣いて無いもん。

「ゴシン！－）イタ！－」

「二コ一コ」

「すみません」

なぜか太陰に拳骨をくらいました。

## 呼び出し（朝）

『呼び出し（朝）』

昨日鬼を退治した朝、ジジイから連絡があり学園長室に入る俺と  
斎、太陰。中には高畠先生と昨日助けた龍宮と桜咲までいる。

「なんのようだジジイ。俺は一時間目からFクラスで授業がある  
んだ」

「ワタシもCクラスで授業がある」

「そう焦らすな。昨日の件で一人がお礼を言いたいと申してのう  
ジジイからそう聞くと龍宮と桜咲が一步前に出てきた。

「白銀先生、伊東先生、太陰。昨日はありがとうございました」

「おかげで助かりました」

「別にいいさ。生徒を助けるのも教師の仕事だろ？」

「ですが・・・」

「それに。あそこに魔法先生がいたら俺は助けに行かなかっただ  
「へ？？」

なぜって顔だな。まあ、当たり前か。

「俺達が魔法関係者だと知っているのは、ここにいるジジイと高

畠先生しかいないんだ。まあ、昨日の一件でばれたがな」

「どうせわたし達を今夜どつかに呼び出しあつと思つてているのでし  
ょう

「フオ！！」

「団星かよ！！

「俺達は行かないからな

「な、なぜじゃ？！」

「昨日はたまたま龍宮達生徒だけだったからだ」

「それに、さつき剣斗は先生が居たら助けに行かなかつたと言つ  
ただろう。それにワタシ達は西の者だぞ」

「――!?」

斎の言葉を聞いて桜咲は殺氣を出して俺達を止めつけてくる。

痛くもかゆくも無いけどね。

「どうしてもダメかの?」

「ダメだ・・・いや。条件を飲んだら行つてやる」

「フオ――条件とはなんじや」

喰い付くな。よほど行かせたかったのか。どうでもいいけど。

「この学園には闇の福音がいると聞いてるが、そいつに呑わせる

「――――――」

「それが呑めないなら俺達は行かない。どうする」

「フム・・・・よからう」

「学園長――」

「よい。あやつにはワシが話を通しておぐ。それでよつか?・白金

先生

「構いません。それで場所と時間は?」

「今日の深夜0時。場所は世界樹前広場じゃ」

「了解。それと龍宮に桜咲。早く行かないと遅刻だぞ。遅刻したら分かつていてるだろ?」

「「ザア――」」

一人は急いで部屋を出て行つた。廊下を走るな。

「どうしたのじゃ?」

「なに、遅刻したら俺と斎の授業で難問を当てるだけだ。太陰、お前も例外じゃないぞ」

「は――――」

俺達はそのまま学園長室を出でていった。

S.i.d.e：近右衛門

「ふうへへ。なんとか来てもうえそいつじや わい」

「そうですね、学園長」

「しかし、まさかエヴァに会わせるとわの?」

「彼が考えている事はまだわかりません。それに昨日も僕が途中から来ていたことも気づいていたみたいですし」

「ワシが覗いているもの気づいておったのう。いやはや婿殿もやつかいですごい者をよこして来たのう」

「味方だと心強いですけど敵だと怖いですね」

「どうしたもんか」

取りあえずエヴァに連絡するかのう。エヴァも応じてくれるとこいのじやが・・・ワシ二のまま死んじやつて構わんかのう

(それがいい)

「フォ！！」

(そのまま死ねば。そのほうがこのかも助かるし)

「フォ！！ フォ！！」

「どうしたのですか？学園長」

「ワシ。プライベートないみたいじゃ

「？？？」

## 呼び出し（夜）

『呼び出し（夜）』

眠い。もし、俺に睡眠を与えてくれる人がいたらその人の願いを叶えて上げよう。

「剣斗、何を考えている？？」

「この後には起こる不幸について」

「……諦める」

「ああ～～。この世には神は潜在しないんだあ～～」

「神はいるだろ？！」

とある神殿

「ハックシユツン！！」

「風邪かい？？」

「ズズ。多分ね」

## 広場

広場に行つてみるとそこには数多くの魔法関係者がいた。もちろん桜咲と龍宮もいた。

「フオ、フオ、フオ。よく来たのう」

「黙れジジイ！！」のまま黄泉の国に送るぞ

「フオッ！！」

「おい君。学園長に向かつてなんてことを言つんだ

「あなたは？」

「ワタシはガンドルフィーー。君と同じ魔法先生だ。君が最近噂

になつてゐる「代田サムライ・マスター」なのか？

「黙秘で」

「きさまー！いいく「だまらんか！！」しかし学園長」

「ワシの言葉が聞けんか？？」

さすがここに最高権力者、一発でガングロが黙つよ。他の先生、生徒これで大人しくなるだろう。多分

「すまんのう。君達が西から来たと知つて少しのう・・・」

「どうでもいい。もともと関東と関西の中の悪さは知つてゐるし俺達は別に麻帆良をどうこうするつもりもない」

「それならよいが。それと昨日は我が生徒を助けてもらつてあり

がとう。ここにいる全魔法関係者の代表して感謝する

「別にいい。それに朝も言つたがあの場所に魔法先生がいたら俺達は助けに行かなかつた」

「――「なつ！――」

思い通りの反応だな、おい。なぜ、ありえないって顔ばかりするんだ。

「君は立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指してないのか？」

「俺達は西の者だと学園長から聞いたでしょ。そんな俺達がそんなモノ目指すわけがない」

「しかし、君は「代田サムライ・マスター」と呼ばれているじゃありませんか」

ウルスラの生徒が話していく。正直言つてウザイ。

「それは、元老院が勝手に言つているだけだ。俺は一度も名乗つた覚えがないし、これからも名乗ることはない。そんな称号もらうより、俺は俺を知つてゐる奴を守るほうがいい。それで死んだのなら本望だ」

俺が暴走しようとするとき斎と太陰が止めに入つてくる。

「クツ！－ジジイ！－約束通り会つたから俺はもう帰る」

「ちょ、ひょっと待つんじゃ。おぬし等の力をまだ見ておらぬ。

どうか、この中の誰かと戦つてくれぬか？」

「はつ？！ここにいる奴じゃ役不足もいいところだ」

「それはタカミチもかのう」

「あたりまえだ。高畠先生ですから太陰に一撃も『えられない』。もし高畠先生が勝つたら俺達も夜の警備員をしてやるよ」

俺の言葉に他の魔法使い勝つた気になつていたが、太陰は十二神将の一角だ。負ける要素など無い。

「いいじゃろう。タカミチもそれでいいか？」

「良いですよ学園長」

「太陰。本氣でやつてやれ」

「ホントに？？やつた！？」

太陰は久しぶりの本氣の戦いに嬉しがつていて。間違えたかな？？

太陰と高畠先生が正面に立つ。おそらく太陰は一撃で決めてくれるであろう。じゃないと高畠先生の身が危ない。

「はじめ！！」

学園長の声と共に高畠先生の居合い拳が太陰を襲い砂埃が舞う。魔法使い共はこれで決まったみたいな顔をしているが

「・・・まさか、生徒にコレを防がれるとは思つてもいなかつたよ」

煙の中から太陰が無傷で出てくる。防いだと云つより風で守つたつて言つたほうがいいかな？？

「舐めないでよ。わたしは十一神将の一人、風将の太陰なのよ。こんな拳いくらでも防いで上げるわよ」

「「「「「・・・・・・・・」」「」」

・・・ばか

「それはどうゆつ事かのう？？白銀君」

「そのまんまの意味ですよ。太陰は十一神将です。ただ、それだけです」

「それをなぜいわん」

「言う必要はない」

「・・・その勝負やめじゃ！！」

「どうしてですか？？学園長」

「どう足搔いても高畠君の勝ち目なんてあるわけなかろう。相手は日本最強の陰陽師安倍清明が使っていた式紙じゃぞ」

「それが、どうしたのです。高畠先生は大戦の英雄。例え相手が清明の式紙だろうとも勝てます」

「いや。僕じゃ勝てない」

「なつ！？」

「白銀君。君は太陰と主従関係はキツチリしてるのかい？？」

「もちろんだ。清明は人を傷つける事を禁じたが、俺は禁じてい  
ない。このままいけば高畠先生の命はなかつたかもしないぞ」

「ほらね。この勝負は僕の負けだ。まさか神将を呼び出すとは」

「俺も予想外ですよ。それじゃ、俺達は帰ります。学園長約束守  
つてくださいよ。それと太陰、帰つたら覚えてろよ」

「うつ！？」

お仕置きは何がいいかな。・・・そうだ。餡蜜を太陰の前で美味  
しく食べよう。そうしよう。

Side 近右衛門

「どうしたらよつかのう」

「そうですねん」

「何を言つているのですか、学園長。彼等をなんとしてでも警備  
員にさせるべきです」

「じゃがのう・・・」

「そうですわ。あの人達が入つてくれたら百人力です

「しかし、白銀君達は断つたしのう」

「彼等も話せばわかってくれます。ですから・・・」

「取りあえず。この件はワシが預かる。それでよういか?」

「ええ、かまいません」

「それで、あの人達が来てくれるのなら」

何とかその場を回避できましたが、どうしたものかのう。さつきまでアレほど批判していたのに困ったのう。どうすればいいのじや？？

## 普通 魔法使い

『普通 魔法使い』

どうも、白銀剣斗だ。昨日は学園長との約束で他の魔法先生会つて太陰の招待がばれるは朝学園長室に行つたら闇の福音とはまだ連絡が取れないと言われるは散々だ。

そして、今俺はこれから授業を始めるためAクラスの教室の前にいる。ここまで聞いて判る人は判るだろう。そう誰もが一度はやつた事がある黒板消し落しだ。まだチャイムが鳴つていない教室の扉に黒板消しが挟まつていて教室の中では他にも罠を仕掛けている声が幾度もなく聞こえてくる。さて、ここはどうしたものか・・・・。考えているとチャイムが鳴つたので取りあえず黒板消しを取りドアを開け通路に張つてあるロープを無視して教卓の前に立つた。

「それじゃ、授業を始めむ」

「起立・・・・礼」

「――おねがいします」――

クラス委員の雪広の号令で全員が挨拶をする。このクラスで全生徒が立つのは俺と斎、高畑先生と新田先生だけだそうだ。まったく、困つた問題児共。

「それじゃ、まずはこのトラップを誰が仕掛けた。正直に答えろ」

「――・・・・・」

反応なし。それじゃ

「今日の宿題は『鳴滝姉妹と長瀬です！』」

「あかつち！――」

「『めん。さすがに宿題倍は困るから

「よ〜〜し。鳴滝姉妹と長瀬は今日提出の宿題の答えを全部書いてもらひうだ。それと明石は今日やる最初の問題な

「ええ！――なんで私まで！――」

「さすがに全部は困るで！」やるな

「そうだよ。先生は私達を虧めたいわけ」

「生徒虐待は犯罪なんだよ」

「うるさい！…コレに懲りてもうトランプなんて仕掛けるな

「私は…！」

「明石は友を売った罰だ。どんな時だって仲間を売ったやつは俺

は許さん」

「そうんなあ～～～」

「その代り。一発目のカード引きをお前にやるから」

「ホント！…ひつひつひ。今日は誰を当ていやつ

明石。お前顔が魔女みたいだぞ。

ついでに言うと俺の授業では名前と絵を描いたカードを使っている。このカードで誰がどの問題やるか決めるためのカードだ。そして見事正解したやつには特別にカードを引かせ次の問題の回答者を決めさせる。このクラスは少し遊びが合つた方が覚えが良いと思ってやってみたが大成功した。もちろん他のクラスでもやっている。

そんなことを言つている間に鳴滝姉妹と長瀬が簡単な問題を取り合っていた。めんどくさいが、十一問ある問題の横に鳴滝姉妹と長瀬の名前を適当に四回書いて行つた。書くたんびに泣くものと喜ぶものがいたがどうでもいいか。

Side : 長谷川千雨  
はせがわちさゆ

「今日の宿題は、鳴滝姉妹と長瀬です」

明石が罠を仕掛けた犯人をばらして教室がギヤーギヤー騒ぎ出しだ。うざい

それよりこの学園はどうみてもおかしいだろう？…あんなデカイ樹があるのに誰も不思議に思つてないし学園長の頭の長さも普通じゃないだろう！…それとこのクラス…おかしいだろう……ありえないだろう……さつきの双子はどう見ても小学生だし。あいつ（茶

「・・・がわ・・・えがわ・・・」

「雲が三日

「は、はい！？」

「この問題。解いてみろ」

「はい」

「それでは、今日の授業は此処まで。高畠先生が出張で今日はいないうからこのままHRを始めるといつても何も連絡事項はないから解散だ。それと、長谷川は俺と付いてくるように」

なんたといふ

角散

そしてあたしは白銀先生に連れられて生活指導室へ入った。

先生とハジてあたしかこには連れて来られたのですか???

とことを他の先生からも聞いてな。何か悩みがあるのであら俺が聞く

卷之三

「世界の政治」の癡根の國

「IJKの学園か・・・・・」

先生もじつはお詫びと同じで「普通」とか言つんだらうな。

おたしにかみが

おかしい。確かにそういったよね。聞き間違いじゃ

「先生。もう一度言つて」

「おかしいって言つたんだが、どこか不満か??」

「ううん。全然。でも、どうしてそう思うんですか??」

「そうだな・・・まず世界樹だ。あんなに大きいのに誰一人として不思議におもわない。むしろ在つて当たり前だと思つていて。それがおかしい理由のひとつかな」

「他にどんなこ？」長谷川「・はい」

「今お前がどんな気持ちなのか今のでわかつた。もし、お前が望むのであればその理由を教えてやる」

「だったら「ただし」

「コレを知ればもう後戻りできんぞ。それでも聞きたいなら答えよ」

「知れば後戻りできないってどうゆう事!?!でも、それでこの気持ちが治まるのなら

「教えてください」

「・・・いいのか?もう戻れなくなるぞ」

「はい。あたしは知りたい。どうしてあたしだけなのかそれを知りたい」

「・・・わかった。長谷川、お前魔法を信じるか??」

「え??」

「魔法。そんな空想世界みたいなあるのか??あるわけねえだろう。

「信じてないみたいだな。まあ、無理も無いか。それじゃ、証拠を見せてやるよ。ブラックティギ・ナル火よ灯れ（アールデスカット）

」

「なつ!??」

「先生の指輪から火が灯された!!」

「せ、先生」

「これが魔法だ。言つても初歩の初歩だがな。どうかな、魔法は信じてくれたかな??」

「目の前でやつていて信じないバカはいないだろ？」「

「それもそうだ。そうじゃ、明日から訓練開始だ」

「訓練？？」

「言つただろ？。もう後戻りは出来ないって、自分の身は自分で守れるように俺が鍛えてやるよ」

「え、い、いや「下手したら死ぬぞ」よろしくお願ひします」

「心配するな。俺がちゃんとお前を守つてやるよ。そうでなければこんな事は言わん」

「先生つて強いのか？？」

「ほう、それがお前の普段の喋り方か。そうだな、魔法世界ではそれなりに有名かな？？」

「いや、そこ疑問にされても」

「大丈夫。ちゃんと教えてやるよ」

「は、はあ・・」

本当に大丈夫なのか。心配になつてきた。

「それと、太陰と斎も魔法関係者だ。それとあのジジィと高畠先生もだ」

「なにいいいいいいいい！」

## 『鍛練』女の会話

### 『鍛練』女の会話

伊東斎だ。全く剣斗の行動には困ったものだ。行き成り生徒である長谷川千雨を連れてきて「魔法を教えたから鍛えるぞ」と言われてもな、ワタシは剣だけが取り柄だし魔法も剣斗と一緒に習つた程度でそれほど使えるわけでも無いし

「はあ～～～～」

色々考えていると長谷川が素振りを終えてワタシを見た。

「はあ、はあ、はあ・・・伊東せんせい・・素振り千回終わったぞ・・・」

ちなみに、ワタシは長谷川に剣術を教えていた。さつきも考へていた通りワタシより剣斗の方が魔法を教えるのが上手いので、ワタシが剣術、剣斗が魔法を教えていた。

「それじゃ、次はワタシの斬撃を受け流せ」

「はあ、はあ、はあ、少しば・・・少しは休憩させり!・・・」

「ん・・・仕方が無いな。少し休憩とするか」

ワタシがそう言い放つと長谷川はそのまま座り込んでしまった。

「まだ、訓練の最初なのが、もうばてたのか?・?」

「し、素人に・・・素振り千回させるな・・・よ」

「なに言つている。ワタシなんかお前の十倍はやらされていたぞ」

「あんたと一緒にしないでくれ。まさか、伊東一刀斎が女だったとは・・」

「仕方があるまい。伊東家に男の子が生まれなかつたのだから」

「だからと言つて女を男として育てるか、普通」

「武家とはそういうもんだ。さすがにワタシが成長して女とばれたあとは男の養子もらつたがな」

「先生が捨てた女のはどうなつたもんか」

「ワタシは楽しかつたがな。男と一緒に刀を振るう事は「現在は違う！」

「まあ、そう怒るな。せつかくの綺麗な顔が台無しだぞ」「び、ビビビ——」「

長谷川がだんだん顔を赤くしていく。

「どうした？？ワタシが素直に答えてやっているのに」「

「び、ビビビしてそんなことを？？／＼／＼」

「なんだ、自分の顔にそんなに自信だ無いか。心配するなお前の顔は綺麗だ。こんな筋肉と刀傷のついたワタシよりだんぜんにな

「そ、そんなことはない。先生の身体も綺麗だよう…」

「そうか・・・・・剣斗もなそう言つてくれる

「先生にとつて白銀先生はどんな存在なんだ」

「剣斗は、ワタシがこの世で唯一背中を預けられる者だ。連理の枝みたいなもんだな」

「地に願わくは連理の枝の如しつてわけか」

「そうゆうことだ。昨日の授業、役に立つただろう。作者までわかつていれば」

「・・・忘れたよ。だが、あたしもそんな人見つかるのかな？？」

「それはお前しだいだな。もしかしたら、すぐそばにいるかもしれないな」

「！？／＼／＼」

「おや？？もしかして」

「ち、ちちち違う！？絶対に白銀先生ではないぞ」

「ワタシがいつ剣斗だと名乗った」

「なっ！？／＼／＼」

「この事は女の約束だな」

「ぜ、絶対に白銀先生には言つなよ！？」「

「ワタシとて武士だ。武士は約束を守るもんぞ」

長谷川は頭を抱えながらうずくまつてしまつたが、これはきっと

良い方へ向つている兆候なのである。うつ

ワタシが長谷川を見ていると後ろから剣斗がお茶持つてやってきた。これで女だけの話は終わりだな。

そのあとワタシ達は剣斗の入れたお茶を飲みながら魔法の話をした。この輪にこのかが入ればもっと楽しくなるなどとワタシが思つたのはここだけの秘密だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4714w/>

魔法先生ネギま！？ 剣聖の騎士

2011年10月10日03時05分発行